

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第127号・平成12年4月1日

年表で読む

古平の歴史

《34》

■郡内での徴税

明治の新政府になって、古平郡の行政のかたちも次第に整ってきましたが、その財源である税金を、どのように徴収するかということがまず差し当たっての課題でした。

古平郡では、松前藩の時代には岡田家が場所請負人として、出稼ぎ漁業者から製品の二割を現品で徴収していました。

開拓使が置かれるようになると、それまでの例にならいそれぞれ漁について、海産税として二割を徴収することが定められました。

しかし、現品は最上の製品を納めることとしたので、実際の価格の上では以前よりも高い額を徴収することになり、そのた

めに業者側は数量をごまかして報告するようになりました。

■海産税の総額

明治四年の海産税については次のような記録があります。

しめ粕	一三、七三九石
身欠	五、〇三八石
鯛・鯨	九、四一〇石
鰯・鰯	二、六四石
鰯油	四〇石
合計	二八、四九一石
税金分	三、九八八石
金額	一七、九四六両

(石以下は四捨五入、札幌管内での税率は一割四分、百石について相場が四五〇両)

また、鯨税を完納した漁民には、開拓使古平出張所から酒などが与えられました。

この外、建網一統について年

額として平均金三両、また永住する者に対しては一戸ごとに税(戸役)を徴収しました。

収納した品物には、明治五年から検印を押すことにして、納税済の漁船や漁具などにもこれを使用しました。

明治六年はやや不漁でしたが製品の値段が高く、翌七年は大漁で、前年の約二倍の二万一千円余りの収納がありました。

その外、同年、古平に海関所出張所が置かれ、移出入の荷物にも課税されることになり、これらが古平郡の主な税収入でした。開拓使古平出張所の経費は年間二千七百円ほどで、全道での鯨・鯨・こんぶなどの海産税が、当時の北海道開拓を進める大きな財源となっていました。

■物品税による課税

明治十三年になると海産税が物品税と改称され、その物によって税率も変わりました。

身欠鯨	收穫高の一割六分
鯛・鯨	同
鯨しめ粕	同
鯨	同
あわび	同
鑑札一枚	二五斤

なまこ 同 十九斤

鯨 收穫高の二割

同 小舟使用者は一割二分

ふぐ 收穫高の一割六分

鯨油 舟一隻に付き*甲四斗

同 同 *乙二斗

(*甲11月12月から翌年五月まで漁をする者、乙11月2月から同年五月まで漁をする者、一斗は約十八リットル)

漁獲物を製品にしないで生売りの場合は、その税率に応じて金で納めることにしましたが、これは今までの煩雑な手数がはぶかれ、新しい税率もこれまでと比べて約四分の一に軽減されました。

△開拓使古平出張所の焼印▽



大正六年

6/28 昨年、一昨年と袋掛けをするような作ではなかったが、今年の上作のようだ、警察署にリンゴの有害鳥獣威かくの願書を出す、沖村、美国方面では大サバとイワシが大漁とのこと、歌棄まで見に行ったが、イワシが岸に寄って陸に上げられている、もっこ一杯分も手づかみした人がいる、子供たちも集まって大騒ぎしている、まるで鯨場のようだ、サバが大漁でサンプ船に一杯もとれたという、珍らしいことだ。

6/30 リンゴ袋が足りないので、袋張りを頼みに歩くが、景気がいいのか袋掛けや袋張りをする人がなくて困る、家の大工仕事、ひとまず勘定する、四十五人分で五十円支払う、あと五十人ぐらいで三百円かかるだろう、袋掛けの方も、二十日までにあと二万ぐらい掛けないとならない、困ったものだ。

7/10 琴平神社の祭礼なので今日は休みだ、袋掛けも出面が足りなくて困っているところ

もある、沢江の山車が、皆揃えの浴衣でハヤシ立てて行く、なかなか賑やかだ、(カ)干場では見世物小屋が二か所もかかっている、大勢の人が集まっている、町中は桜の花とちようちんで飾られている、(本)では店先に陳列品を並べ、蓄音機をかけて賑やかだ、古平座では東京名代市川小伝次一座が来ている、児雷也物語りなど大道具を使ってやっている、見物に行つて十一時頃

高野名幸作さんの日記から



【28】

帰る。

7/11 浜町に神輿が泊まったので、今日は浜町は賑やかだ、(本)小路から(カ)干場にかけていろいろな店が出ている、沢江と丸山町の山車が賑やかに通る、例年だと浜町、港町、入船町からも山車が出るのに、景気も悪くないのに今年はどうしたのか出てない、午後から降り出した雨が夜になって本降りになった、行列も雨に当たつたらう、せめて

今日一日だけでも天気なら良かったのに……。

7/12 昨日の雨は今日も一日中降っている、今月に入ってから晴れたのは三日ぐらいしかない、毎日のように雨で袋掛けも遅れて実に困る、今年は袋張りから袋掛けまで、出面賃の高くなったのも困りものだ、出稼ぎが多いのか人手も足りなく、女の出面賃も五十銭になった、このところ綿糸はますます暴騰

してきている、今後、どれだけ上がるか予想もできない。

7/15 (全文掲載)

七月十五日 雨

今日もまたいやな雨が一日中降り続く。今月に入つて三日だけより良い天気がない。こんな雨降りもないものだ。大切な袋掛けの時期を、雨の為に過ごすのは実に気のもめることだ。どこも出面不足と雨天には大こぼしである。正隆寺へ身延山から

大僧正が来られるというので、迎えの人々で大騒ぎである。雨の中、二時頃到着されて正でご休憩、三時頃正隆寺へお出でになられたとのこと。美国方面コナゴ漁があるというので網を買客が来る。

7/16 永らくの雨もようやく晴れ上がり、青空になった、出面の不足で困つたがどうやら十人ほど頼むことができた、父と母は正隆寺へ大僧正さんがお出でになったというのでお参りに行く。

7/18 今日天気が良い、イワシが上がつたというので浜へ行って見ると、(カ)の浜から沢江刈、種田の浜までイワシがはね上がっている、家へかごを取りに戻る、6、7寸もあるのが大群来だ、大サバに追われたのか、岸でバシバシバシヤしているのをつかまえるのが面白い、引き網でもやったら、一回で保津船(ほつせん)に一杯はとれたろう、浜は黒山の人で戦場のような騒ぎだ、こんなことは何十年来ないことだろう。

以下次号へ続く

古いノートから ⑦

稲倉石の思い出つづり



富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

私の入学式

— (昭四十二・四記) —

昭和十二年の春だった。

晴れ着というには、あまりにもおそまつな着物を母から着せてもらった私は、次姉に付き添われて入学式にのぞんだ。

当時のわが家は、その日ぐらしの貧しさの真っ只中で、父も母も、朝は私たちが目を覚めるころには既に働きに出かけていたから、日中は、子供たちだけが寄り添っての生活だった。

一日も休むことなく働いていた母が、仕事を休み、入学する私に色あせたツルツルテンの短い着物を着せ、おなかのあたりが二か所も横切れていたのを

帯で隠し、ようやく身なりを整えてくれたのに、私を入学式に連れて行ってくれたのは、何故か小学校を卒業したばかりの十二才の次姉だった。

おそらく、母には人前に出られる着物がなかったのだろう。よそでは、母と子が着飾って入学式に行くのに、それすらも出来ない母の思いが、人の親となった今の私に、母の悔しさ無念さが心の壁に突き刺される思いがする。

だが、そんな事など考える年代でもなかったし、貧乏や恥ずかしさも知らない私は、次姉の暖かい手を握りながら喜びいさんで入学式に臨んだ。

いま、あらためて入学記念の

写真を見ると、男子生徒二二三名の殆どが真新しい洋服で、着物姿が二十六名。それに大部分がランドセルだったのに、肩掛けカバンが十名足らず。

もちろん私は、着物姿の肩掛けカバンだった。

あれから三十年余。

次姉は、小学校を終えた十二才の春から住み込み店員・お寺の雑用女中・化学工場の下働きなどを転々とし、その苦勞と過勞が重なり、不治の病におかされてしまった。

働いても働いても楽にならない生活。蓄えもなく、満足な治療も入院もさせてあげられなかった母は、神仏の加護にすぎるほかになかった。

人通りの絶えた町はづれから更に半里も山奥にある古い祠に願をかけ、深夜の真つ暗な獣道を、かすかな月の明りを頼りに丑の刻の百日参りをつづけた。

「自分の命を縮めてでも、娘に命を回して下さい」

と祈願をつづけたが、その願いも空しく、闘病三年目の昭和十九年の秋、灯火管制の暗い一室

で、貧乏に耐え病氣とたたかいながら、幸せ薄い十九才の短い生涯を閉じた。

冷たくなった体を抱き締めた母は

「今度生まれる時は長い命をいただいて、また私の子供になって下さい。その時は必ず幸せにしますから。」

向こうに行ったら脇見をしないうで、皆んなと一緒にみ仏様のところに行きなさい。

皆んなの言うことを聞いて可愛がられるんだよ。

苦勞ばかりかけ、ご免して下さい「と、涙ながらに語りかけ、詫びていた。

その母も、幸せ薄い人生のまま他界してしまった。

×

×

明日は、稲倉石小学校の入学式。新調の服・ランドセル・帽子などを枕元に並べ、入学式が早く来るようにと、早々に寝入った長女を覗きながら、遠い昔の母と次姉の悲しい思い出が頭をよぎった。

— 母と次姉に合掌 —

断章小説 「ふるさと遙か」

反抗の軍歴

Ⅶ

土口 羊我 雄

終戦。生きていた喜びを噛みしめて、祖国に帰還する日を待つ日々は長かった。

戦時。大きな怪我は一度あったが、何一つ病氣もしなかった吉野の身体に、終戦と同時に、思おもよらぬ病魔が次々と襲いかかってきた。

最初はマラリヤであった。体温計の針が一番上で振り切れるほどの高熱で、彼は一夜死線をさまよったが蘇生した。

次には肛門の横が腫れて欠潰し、手をあげた部隊の軍医が、進駐軍下の病院に彼を送った。

白衣を着せられた彼の復員は早められた。終戦後八か月で、彼を乗せた復員船はみぞれの降る祖国の大竹港に入港した。

北海道までの汽車の旅は長かった。出征時通過した、緑したる広島市は、山の下まで何一

つ無く廃墟の街となっていた。

乗り換えの上野駅では、持参のおにぎりを食べようにも、どこから集まって来たのかアカだらけの子どもたちに包囲され、彼等の空腹の一部を助けるハメになった。

戦争ほどの罪悪はない。軍隊の横暴をこの三年間体験した吉野の切実な思いであった。

白衣の彼は、真つすぐ故郷には帰れず、温泉地にある旧海軍病院に入院させられた。

終戦時から、この病院は国立病院と改称されたが、まだ海軍の残滓（ざんし）は色濃く残っていて、病床を並べた陸軍の兵から、吉野は着くなり苦情を聞かせられて驚いた。

朝七時「総員起し」の号令が病院の廊下を突抜け、次いで国旗掲揚のために門前に集められ

た入院者たちは、「宮城遙拝」までさせられるというのであった。

吉野があきれて真偽を確かめるまでもなく、答えは向こうからやってきた。二人の部下を従えた海軍の旧軍曹が吉野のベッドに近づくなり、「吉野さん、しばらくでした。今カルテを見て、びっくりしてとんで来ました。何でも不便なことがあったら私に言ってください。」

同郷の後輩、堀川和也であった。召集の吉野などよりはるかに早く海軍に志願し、世が世であれば准士官にもなっていた。どこの戦場でやられたのか、堀川の二の腕には治療後のケロイドが凄まじく走り、ほかの部分にある傷を治療中ということであった。

甲板係として彼はこの病院に君臨し、元軍医たちからも頼りにされ、看護婦たちの人気も集中していた。

吉野は、これまでの病院のあり方を確かめてから堀川を呼んだ。「新聞に発表する前に、君にだ

けは先に知らせる。これがその原稿だ。国立病院の中に士官室という別病室。ほかの者は食事を賄い方まで足を引きずって取りに行くが、旧士官には看護婦が運んで行く。「総員起し」とはなんだ。海軍も陸軍も今はない。従ってこの病院にもない。さらに国旗掲揚も宮城遙拝とやらも、やりたい者だけにやらせろ。少なくとも入院患者に強制することではない。朝から君が叫ぶ、甲板掃除などもってのほかだ。病院側の意向次第では、この原稿はそのまま送るから知ってほしい。俺も甲板だった。良くも悪くも上下の中で苦しむのがその役目。覚悟してやってくれ。」

吉野のベッドの枕の下から原稿が消えうせ、看護婦の一人が同室の旧陸兵から盛んになじられたが、吉野は笑っていた。

ほどなく、彼の思惑通り病院は変り、彼は長い旅路の終りを故郷の港で終えた。堀川和也がにこにこして出迎えてくれた。

— この稿終わり —

遙かなる故郷の思い出

わが闘病日記

[64]

橘 義我 春

かった。

九月四日 (水)

人工ペースメーカーには電極からの細長いリード線がついていて、それを心臓の静脈から心臓の中へ入れてやり、リード線の先端についているかぎを、船のアンカーのように心臓の下の方に固定する手術で、手術後に腕を動かすとそのアンカーのようなかぎが外れてしまう。

四人の先生方の中で執刀されたのは心臓外科の池田教授で、ペースメーカーの手術ではベテランの先生で、病院でも人望があり、心臓外科では有名な先生である。

おかげさまで、ペースメーカーの埋め込み手術は無事に終了した。心臓の方は一分間に七十回と正確に動いていて、調子は順調なようだ。

ペースメーカーを埋め込んで良

第三病棟四階・B病棟の八人部屋の病室に変更となる。間もなくして、池田教授が手術後の様子を見に来てくれた。ちょうどそのとき私の家内が面会に来ていて、持ってきた『せたかむい』を枕元に置いてあった。古平町と印刷されたその封筒を見た池田先生が、

「古平町ですか。いやあ、懐かしいですね」と言われた。

「池田先生は、古平町をご存じですか。古平は田舎の町です」「私が北大の医学部を出て、一番最初につとめた病院が古平の病院ですよ」

全くの奇遇であった。それから家内と三人で、古平町の話に

花が咲いた。

池田先生の話では、浜町から稲倉石の方へ行く道路沿いにあった、漁師の番屋のようなどころが宿舎だったそうで、古平町の西部方面の大火のことも覚えていて、稲倉石鉱山のことも話されていた。その当時、若い医師だった池田先生のお世話になった人もいるのではないだろうか。

こうしてみると世の中は広いようで狭いもの、池田先生にも『せたかむい』を一部どうぞと差し上げたなら、喜んで持つて行かれた。

それからは私の病棟へ来ると寄り道して、古平のむかし話をしてから帰って行く。なかなかおもしろい先生である。

私は退院に当たって、身体障害者診断書で障害の程度は一級に相当すると認定され、東京都から一級身体障害者手帳を交付されて、いろいろと社会福祉の恩恵に浴している。

退院後も六か月に一回、ペースメーカーの定期検査が杏林大学病院であるが、その度に池田

先生の診断を受けていた。そのときに、たまっていた『せたかむい』をお渡しすると大喜びだった。

それが平成十一年十一月十五日、ペースメーカーの定期検査に杏林大学へ行ったら、受付の話では池田先生は定年で退官されたと聞きがっかりした。検査に当たったのは、藤本先生というまだ若い先生であった。

退院してうれしいが後遺症のこり、これからは、それらと一生つき合って生きていかなければならない。

1. 手足の末梢の血の流れが悪く、夏でも冷たく、厚い靴下を履かないと寝られない。

2. 視力の低下

3. 味覚オンチ、何を食べてもおいしくない。

4. 知人の名前を忘れる。

5. 体の平衡感覚がとれない。

(駅の階段を降りるときなどが怖い)

6. 文字がうまく書けない。

(特に筆字)

7. 言語障害(少しろれつが回らぬ)(次ページ三段目へ続く)

忘れていた？

私の誕生日のお祝い!!

渡辺 ハツエ

『歲月人を待たず』歳をとるごとに、月日の経つのが早く感じられる今日このごろです。時は一刻も私の歩調に合わせてはくれません。

過日、一月十五日に小包が届きました。息子の嫁さんと孫二人の連名です。私ははやる心を抑えながら、包みを解くのもどこかしく開けて見てびっくりしました。私の誕生日のお祝いのメッセーじとお菓子が入っていました。当人の私が、自分の誕生日を忘れていたのです。

嫁さんからは、

「お母さん、誕生日おめでとうございます。いつまでもお元気で、長生きしてください」と、心優しい、温もりのあるメッセーじに、「いつも何かとお世話になっております。ありがとうございます。」

という、私への感謝の言葉も添書きされていました。

中学三年生の孫娘は、

「おばあちゃん、平成十二年一月十五日、お誕生日おめでとうございます。去年までは、成人

の日とおばあちゃんの誕生日がいつしよだったので、祝日でもおめでたい佳日だなあと思っていたものでしたが、今年からは成人の日が替わったので、ちよつとさびしく思います。これからは一月十五日は、私にとっては特別な日なのです。おばあちゃん、いつまでも長生きして優しいおばあちゃんであってほしいですね、そして、私たちを見守っていてください。よろしくお願いします。」

小学六年生の孫は、

「おばあちゃん、お誕生日おめ

「(前ページ下段より続く)
らない」

8. 大好きなカラオケもうまく歌えない。特に小節が回らなくなつた。

この後遺症も、前向きにリハビリに取り組んだらよい方向にいくのではないかと見ている。要は本人のやる気次第だと思っている。

もう一つの問題は、心臓病の

でとうございます。お元氣ですか。毎日寒い日が続いています。北海道は寒そうですね。風邪をひかないように氣をつけてください。そして、いつまでも元氣で長生きしてください。

こちらは冬休みも終わって三学期に入りました。一月十一日始業式で、学校へ行つて来ました。中。お友達にも逢えました。中学校進級も近くなり楽しみです。小学校最後の学校生活、そして六年生最後の三学期、がんばります。

中学校は勉強もいっそうむずかしくなるし、部活動もあつて

不整脈と心臓肥大の方は治療していただいたが、まだ心臓の病氣として『狭心症』と、『心房細動』が残っている。さすが病氣のデパートといわれるだけあつて、この二つの病氣が残ってしまった。

退院後は、心臓の専門医・くろだ先生の指示通りに日常生活をし、健康の開腹を待ちたい。

——つづく——

大変忙しくなると先生やお姉ちゃんから聞いています。今年も、夏には北海道へ行くのを楽しみにしています。おばあちゃんも楽しみにして待っていてください。ね、それでは、おばあちゃん元氣でね。

おばあちゃんへ

△終わり▽



船

(はしけ)

竹内 コト

国道が完成するまでは、古平から余市へ出るには定期船でした。夏の間はバスも通っていましたが、便数も少なく、料金も船の二倍以上だったように思います。冬期間は美国へ余市間は定期船に頼るしかありませんでした。

用事があって札幌からの帰りのことでした。当時、余市の小原回漕店の棧橋で定期船を待っていたら、あいにくと急に海が荒れてきたようで、船が棧橋に着けなくなり、そこではしけが出て、乗客を沖の船まで運ぶことになりました。

はしけは上下に大きく揺れながら、もどかしいくらいゆつくと進んで行きます。沖に止まっている船も揺れているので、それに乗るものもなかなか大変でした。

どうやらみんなが乗船して船

が走り出しましたが、航海中も船酔いで気分が悪くなり、何とかして早く着いてくれないかと、ただそればかりを祈るような気持ちで乗っていました。やがて古平の港が近づいて来ましたが、浜町の沖にかかるとう度は吉井回漕店のはしけが待っていて、そこでまた乗客の乗り降りがあります。私はここで降りましたが、陸でははしけにつないだロープを

< あ と が き > に代えて

★去年から今年にかけて、物好きな人？にとっては話題がイッパイ。100年ひと区切りの「世紀」の替わり目は体験する人も多いのですが、「1000年」の替わり目となると、人類もまだたったの2回しか体験したことがないのです。

★西暦と月・日を並べて、2種類のすべての数字が偶数になるのは、2000. 2. 2のあとは当分ありません。

過去では888. 8. 28です。奇数となると1999. 11. 19で、この次は3111. 1. 1です。

★今年はどうう (閏) 年で、4年に1回ありますが、西暦の末尾が00の年は例外としてどうう年になりません。ところが400で割り切れる年はさらに例外としてどうう年です。今年 $2000 \div 400 = 5$ で割り切れるので、例外がふたつ重なって、どうう年というわけです。次は2800年までありません。

二、三人で引つ張っています。はしけが岸に着くと、あゆみ板という一人が通れるような厚い板を渡して、それを渡って降りるのですが、浜に下り立つとは

っとしました。今ではもうはしけを見ることがありませんが、鯨漁が盛だった時には、このような形の船が活躍していたものでした。

川柳

北 政 道

萌 (きぎ) 春こちらまだまだ雪の中
福寿草咲き北国春匂う
春の声試してみたいバイアグラ
いつの世も政治に遠き貧の中
○ (ゼロ) 金利さりとて悪事など出来ず

石井 愛子

入学金孫の笑顔に祝い金
子と話す幸せ寄せ来る春になり
両親の思い出こぼれ浮いて来る
渡辺 ハツエ
早起きは家計狂わす燃料費
バスデー祝ってもらえる老いの幸
轢かれまい轢かない心で事故防ぐ



古平岬短歌会三月詠草

荒磯にしゃがみ岩のり搔く熾丸めし背なに春の雪舞ふ
 石倉のつづく雪道歩み来て冬日に光る石畳に遇う
 ひなの節句に頂きし桃の花いとし小さく咲きて春を呼ぶごと
 寒すずめ桜の枝に飛び交ひて雪のちらばひ花散るごとし
 ハイビスカス茶の間の鉢に咲き盛り窓越しに近し雪の山々
 小さき葉の芽ぶき初めたる桃の枝蕾をかぞへ春を待ちおり
 窓の辺に雪ふる空を見るごとく梅花いくつ紅く咲けり
 毎年を来るヒヨ鳥か餌台に雀ら小鳥ら追ひて居座る
 季(とき)移る風と思へど弥生なかばを日すがら吹雪く窓を暗めて
 寮母さんが包みてくれし桃の花蕾多いを労はり帰る

竹内コト
 池田テル
 榊佳代
 鈴木時子
 東美知
 田中香苗
 堀典子
 丹後初江
 山口スエ
 奥山きよみ

古平ホトトギス会

関口勝志

齊藤波留

よしざきり

何も彼もイニシャル入れて一年生

寝静まる時を気長の毛糸あむ

山口悦子

仲谷比呂古

露天湯の薬草匂う秋日和

籬にもほとけにもとや花ダンゴ

越野敏雄

越野清治

風邪の眼は室内の隅々まで走り

糶台のせり落したるたら子かな

大和田絵伊

室谷弘子

何もかも予定狂ひし春の風邪

足跡は北きつねらし軒のもの

福井幸平

山口浪

対岸の雄冬峰包む春の虹

新年を東都の息子呼んでくれ